

『さながら祭りの日のように』（創元社、2002年4月）

名誉教授 西田 英樹

『エッカーマンとの対話』のなかで、ゲーテは一八二〇年代に早くもニーチェのいう「あらゆる訪問客のうちで最も無気味な訪問客」（ニヒリズム）の足音が次第に戸口に忍び寄りつつあることを予感していましたが、実際、ヨーロッパ文化の完成期に生まれついたゲーテが他界した一八三二年頃には、神と世界との調和的体系の総決算であったヘーゲルの完璧な形而上学の大伽藍が崩れて、ニヒリズムが顕在化し、それがヨーロッパに蔓延し始めていました。それからおよそ半世紀してこの世に生を享け、やがて世紀末から二〇世紀前半の夜空に光芒を放ち始める詩人たちにとって、ニヒリズムはすでに動かしがたい現実となっていました。彼らは否応なしにニヒリズムの洗礼を受け、自らの血の中に避けがたくそれを担って行くほかなかったのです。

本書ではこのような時代状況のなかで活躍した五名のドイツの抒情詩人・リルケ、ゲオルゲ、ホーフマンスタール、トラークル、ベン・をとり挙げ、彼らがどのようにしてニヒリズムと対決しながら、新しい文学の磁場を開拓し、そこにおのが詩的活路を見出していたか、その精神の軌跡をつぶさに観察しています。

本書は三部から構成されていますが、その第一部リルケ論（七論文収録）では、ニヒリズムによって空洞化し、疎外化した生を克服するために、仕事の成果のみを重視する近代の業績万能主義を切り捨てて、生の内実、プロセスを内側から満たすという生き方に徹しようと努めたリルケが、彼の詩作の原点であり、原風景でもある内面空間を如何にして言語化したか、現実の生をいわば裏返して内側をむき出しにしたこの詩人の用いることばとはどのようなものであるのか、その特質を像言語論（フィグアー）の視点から考察しています。

このようなリルケの反日常的・反市民的な姿勢と対極的なあり方を示したのが中期以降のゲオルゲです。彼は世紀転換期の精神的貧困と産業第一主義的社会の人間疎外を憂え、自ら指導者となり、司祭となって力と品位を備えた美しい生を甦らせようとします。その際彼は「偉大なものが再び偉大である」ことのできる時代の則るべき新しい条件、法則が何であるのか、それを文学によって示そうと試みました。

本書では、以上の論考を第二部ゲオルゲ論において「私は聖なる焰の火花…」という表題で扱っていますが、もう一篇の「フランスの光と薫り」では、斬新なフランス象徴主義の森に分け入り、つややかさと香りと響きの豊かな言語をドイツの詩にとり入れようとした若き日のゲオルゲが、それらを消化し、やがて彼独自の美しい硬質の輝きを放つ、研磨されたことばを獲得するにいたるその言語造型上の秘法の解明に力を注いでいます。

第三部・リルケ・ゲオルゲと同世代の詩人たち・では、主観的な唯美主義による詩の孤独を、生の共同体に向かって開かれた場へ、無時間の世界を外部時間の有限性に溶け込ませることの可能な場へつなごうとしたホーフマンスタール論、そのような方向とはまったく逆に、ひたすら現実を非対象化し、具象性をできうるかぎり回避してことばの純粋化・非物質化をめざし、自らの詩的宇宙を構築しようとしたトラークルのことばの錬金術、そして最後に、崩壊してしまった現実のさなかで、崩壊する自己自らを内容として体

験し、そこから新しいリアリティーを確立しようとしたベンの芸術上の実験などを解説しています。

本書の刊行が決定した当初は、「ドイツの抒情詩からみたニヒリズムと文学」といったテーマで、抒情詩を通して文学思想史の立場から二〇世紀前半の時代的特徴を浮彫りにしたいと考えていましたが、結果的には、上掲五名の詩人の作品がそれぞれ誕生する際の、そのメカニズムに光りを投ずることにウェイトが置かれることとなり、いささかおおげさな表現をお許しいただけるならば、「詩の発生学的研究」と呼べそうなニュアンスを色濃くもつことになりました。

いずれにせよ、ニーチェの言葉の表現力の限界、伝達の不十分さ、それに由来する言葉への懐疑、もしくは不信感を宿命的に背負わねばならぬ言語芸術家たちが、その幾多の苦難を乗り越えて創作への意欲を燃やし、心に躍動感をすら覚えながら、魂の陶酔を蜜のように内面に抱くとき、その生はみずみずしく充実し、「さながら祭りの日のように」(ヘルダーリン) 清朗感に溢れて、永遠に向かって開かれるように思われます。

「さながら祭りの日のように」 - このタイトルは、無のなかから詩的営為によって、純粹な魂の孤島を守りぬき、そこから明澄な精神の殿堂を孜々として築き上げた詩人たちの魂の陶酔を言祝(ことほ)ぐにふさわしい言葉ではないかと思っています。